

マイケル・ポランニーにおける 暗黙知論と市場システム論の論理的関係性

小 島 秀 信

- I はじめに
- II 暗黙知の構造
- III 自生的秩序とコーポレート秩序
- IV 暗黙知論と市場システム論の論理的関係性

I はじめに

マイケル・ポランニーは暗黙知論の提唱者として有名であるが、野中郁次郎らの精力的な紹介によって経営学界には特に広く知られている。野中自身はポランニーの形式知と暗黙知の議論に自説は依拠していると自覚的に述べているが、近年では経営学界の内部からもポランニーの暗黙知論との差異が指摘されている。言うまでもなく、そうした議論は非常に重要なものではあるが、ポランニーの暗黙知論は経営学に留まらない非常

【凡例】ポランニーの著作は下記の略記号を使用し、引用に関して本文中に原著頁数を明記し、邦訳のあるものは漢数字で邦訳頁数も併記する。なお、[] は引用者の補足であり、引用にあたっては、邦訳を参照しつつも必要に応じて適宜改訳してある。圏点は、原著者のもの (...) と引用者のもの (...) を区別する。SFS = *Science, Faith and Society* (1946), University of Chicago Press, 1964. [中桐大有・吉田謙二訳『科学・信念・社会』晃洋書房、一九八九年]

LL = *The Logic of Liberty* (1951), Liberty Fund, 1998. [長尾史郎訳『自由の論理』ハーベスト社、一九八八年]

PK = *Personal Knowledge: Towards a Post-Critical Philosophy* (1958), University of Chicago Press, 2015. [長尾史郎訳『個人的知識——脱批判哲学をめざして』ハーベスト社、一九八五年]

SOM = *The Study of Man*, University of Chicago Press, 1959. [中山潔訳『人間について』ハーベスト社、一九八六年]

TD = *The Tacit Dimension* (1966), with a new foreword by Amartya Sen, University of Chicago Press, 2009. [佐藤敬三訳『暗黙知の次元——言語から非言語へ』紀伊國屋書店、一九八〇年]

KB = *Knowing and Being*, edited by Marjorie Grene, University of Chicago Press, 1969. [佐野・澤田・吉田監訳『知と存在』晃洋書房、一九八五年]

M = *Meaning*, University of Chicago Press, 1975.

また、本稿は JSPS 科研費 JP18K12220 の助成を受けたものである。

- 1 野中・竹内曰く、「認識論の次元については、マイケル・ポランニーの『暗黙知』と『形式知』との区別によっている」(Nonaka, I. and Takeuchi, H., *The Knowledge-Creating Company: How Japanese Companies Create the Dynamics of Innovation*, Oxford U.P., 1995, p.59. [梅本勝博訳『知識創造企業』東洋経済新報社、一九九六年、八八頁])。それに対する経営学内部での批判については、榊原研互「ナレッジマネジメントの可能性と限界——組織的知識創造理論の批判的検討」(十川・榊原他著『イノベーションと事業再構築』所収、慶應義塾大学出版会、二〇〇六年)などを参照。

に広いパースペクティブをもつものであったということを忘れてはならないだろう。それは科学哲学のみならず、経済学、政治学、社会学、宗教学などに対しても既存の見方の転換を迫るものであった。しかし、我が国では「暗黙知」という名前のみが独り歩きした結果、その方面での議論の展開があまり進まなかったことは否定できない。²

ポランニーの著作の幅広さを一瞥すれば、ゲルウィックのように「世界の全てが彼の真の唯一の関心なのだ」³とも言いたくなるが、本稿では、彼の暗黙知論と自由論、とりわけ自由経済論との関係に焦点を当てて議論したいと考えている。彼における暗黙知論と自由経済論の関係性についてはこれまで必ずしも明らかにはされてこなかった。アマールティア・センが『暗黙の次元』に寄せた新版序文で言うように、前期の物理・化学を専攻する自然科学者時代、中期の反計画経済論を展開する社会学者時代、そして後期の暗黙知を提唱した哲学者時代へと三区区分される傾向のあるポランニーであるが、その『「移行」を『断絶』と見るのは間違いである』(TD:ix)と云うのであれば⁴、そこにおける関係性とは如何なるものであったのかを明らかにせねばなるまい。しかし、その「移行」を「断絶」と見ない多くの研究者ですら、その内的な関係性については明示的に論じてきてはいなかったのである。

人文社会科学の領域に限ってみれば、特にポランニーにおける自由経済論から暗黙知論への中・後期間の「移行」が重要なターニングポイントとなるはずであろうが、その二つの議論の関係性を明確化しようとする試みは海外でもこれまで重視されて来ず、先行研究も皆無と言ってよいほどであった。ところが近年、R・W・ムーディやR・T・アレンのように、研究者の間においてもようやく議論されるようになってきた。彼らの議論については後に見ていきたいと思うが、私見では、ポランニーにおける自由経済論から暗黙知論への「移行」は力点の移動であって、思考様式としてはある程度の共通性を有していたと思われる。その意味では、まさしく「断絶」ではなく、「移行」、もっと言えば発展であったと云うことができよう。

ノーベル賞級の成果を挙げていた科学者ポランニーが、既に名声を獲得していた物理・化学分野から、哲学・社会学の分野へと転向したのも、一九三五年のソ連のN・

2 我が国でポランニーを統体的に論じようとしたのは近年では佐藤光『マイケル・ポランニー「暗黙知」と自由の哲学』(講談社、二〇一〇年)ぐらいであろう。佐藤も暗黙知論の独り歩きにより、ポランニーの哲学体系がより壮大な「自由の哲学」であったことが看過されてしまうことに危機意識をもっている。経済学界においても、猪木武徳「経済と暗黙知——知識と技能に関する一考察」『季刊現代経済』(一九八五年春号)など、無視されていたわけではないが、そこでも議論は技能としての「暗黙知」に限定されていた。

3 Gelwick, R., *The Way of Discovery: An Introduction to the Thought of Michael Polanyi*, Oxford U.P., 1977, p.30. [長尾史郎訳『マイケル・ポランニーの世界』多賀出版、一九八二年、四八頁]
ポランニー自身もそのように述べていた。

4 センも、もちろん何故そう言えるのかについて詳細な説明をしていない。ゲルウィックは最初期の医学者時代を加えて四区分している (*Ibid.*, p.31. [四九-五〇頁])。

I・ブハーリンとの会談に主因があったことを考えれば、ポランニーにとって自由なる政治経済システムの構想という問題意識が、一貫した本質的なテーマの一つとなっていたことは疑いないだろう。ブハーリンは科学的探究の方向性は公益の方向へと、つまりは五か年計画の実現に資するような方向へと自ずと向かうであろうと考えていたが、このように科学的探究の方向性が公益の名の下に政治的に規定されていることを知ったポランニーは、「独立した科学的思考の存在そのものに対するこうした否定」(TD:3/一四)に衝撃を受け、政治経済の自由と、科学の自由や知識の在り方が無関係ではないことを理解したのである。そして、そうしたブハーリンの思考は、対岸の火事などではなく、イギリスのJ・D・バナルをはじめ、自由世界の科学者たちの中にも浸潤しつつあった。それとの対決と科学的自由の守護とを決意したポランニーにとって、経済体制論と科学論、知識論は有機的に連関していた。本稿は、旧来ほぼ等閑視されてきたポランニーの知識論と経済体制論、自由経済論との思考様式における共通性を論ずる一試論である。

II 暗黙知の構造

ポランニーは、「我々は語りうることよりも多くのことを知りうるという事実から始めることで、人間の知というものを再考しよう」(TD:4/一五)と述べていたように、言語化しえぬ知の領域の重要性を指摘していたのであるが、この非言語的な知は、経営学で言われるような知識ストックを指すものではない。ポランニーが問題としていたのは、人の有する知識そのものではなく、《知る》ということはどういうことなのかということであった。その点では、未活用の機械や余剰在庫に関する知識や人脈などといった知識ストックも包含するハイエクの「局所的知識」の概念とは明確に異なる。例えば、我々は知人の顔を認識しうるが、「我々が知っている顔をどのようにして認識しているのかを通常我々は語ることができない」(TD:4/一五)のであり、言語化できないのは、知人の顔や他人の顔についての知識という固定的な知識ストックではなく、我々がどのようにして、知らない他人の顔ではなく、知っている知人の顔を識別し、認識しうるのかという動的なプロセスである。この暗黙たらざるをえない動的なプロセスの部分でポランニーは「偉大かつ不可欠な暗黙的な力 (tacit power)」(TD:6/一八)とも呼んでいる。

知を完全には言語化できないとなると、当然、言語によって伝えきれないものが残る。したがって、言語的コミュニケーションとは発話者の能動性と受話者の受動性によって成立しているのではなく、受話者には、その残された伝えきれないものを発見しようとする「知的努力 (an intelligent effort)」(TD:6/一七)が求められるのであり、発

話者と受話者の双方に能動性が求められるのである。ポランニーがゲシュタルト心理学の通念的解釈に同意しえなかったのは、ゲシュタルト心理学に含まれる非能動的な側面であった。「[ゲシュタルト心理学]の解釈は、知を求めるときに、我々の感覚に差し出された手掛かりを探究したり、評価したりするように知覚を促すような、いかなる意図的な努力 (intentional effort) の余地をも残さないのである」(PK:98/九〇)。

知人の顔を認識するということは、目や鼻の特徴といった顔の諸細部を経験的に感知し、それらを統合して全体的な顔の特徴を知ることなのであるが、一般的なゲシュタルト心理学では、各細部が自ずと均衡状態に達し、全体的な顔の特徴を知ることができるとしてしまう。それに対して、ポランニーは、全体的な顔の特徴などに関する包括的な知というものは、目や鼻の特徴といった諸細部を暗黙的かつ能動的に統合することによって形成されるものであり、「知を追求する中で成し遂げられる経験の能動的形成の結果」(TD:6/一八)であると考える。この能動的な「形成ないしは統合 (shaping or integrating)」こそ、「それ自体明示不可能 (unspecifiable)」(KB:126/一六一)なものであり、つまりは暗黙的なものでしかないのである。

経営学のように暗黙知をコツや勘であると言うとしても、その場合のコツや勘とは職人の静的な知識ストックなどではなく、「技能とは、我々が定義しえない関係に従って、識別しえない要素的な筋肉諸活動を結合 (combines) すること」(TD:8/二一)に他ならない。つまり、革靴職人の技能という場合、革の裁断や縫製にあたって筋肉をどのように動かすか、視線をどう動かすかといった諸細部を能動的に結合ないしは統合することによって、革靴製造という全体的な意味を我々は形成しているのであり、その際、どの諸細部を如何に結合したのかについて言明することはできないということである。

そうであるとすれば、暗黙知は二つの層から構成されていると言うことができよう。友人の顔を認識する場合も、我々は目や鼻、輪郭といった諸細部を感知し、それを手掛かりにして全体像としての友人の顔を認識しているはずであるが、その際、諸細部に明示的に注目することはなく、つまりは暗黙のままに感知しているのであり、我々が明確に意識して注目しているのは、全体的な顔の特徴の方である。明示的に意識に上るのは顔全体の特徴であるとしても、我々は諸細部を無意識的にというよりも言わばサブとして、「従属的」に感知しているのであり、⁵ポランニーは、『個人的知識』においてこのことを、顔全体に注目し、そこに焦点を当ててメインとして感知する「焦点的感知 (focal awareness)」に対して、「従属的感知 (subsidiary awareness)」と呼んでいる。この焦点的感知と従属的感知という表現を使っていない有名な『暗黙の次元』においては、端的

5 諸細部の感知が無意識的なものではなく、あくまでも従属的なものであるということは重要である (KB:197/二五二)。従属的には感知しているからこそ、そこに注意を向けうるし、それによって意味ないしは包括的存在の崩壊が起こりうるのである。

に「顔つきを識別するということは、顔の諸造作を——それらの結合した意味（joint meaning）に注目するために——我々が感知していることに依拠しているのである」（TD：12／二六）と述べているが、この「我々が感知していること」というのが先述の「従属的感知」のことであるのは言うまでもない。同時期に書かれた『知と存在』や晩年の『意味』では再び一貫して焦点的感知と従属的感知という表現が使われているが、この暗黙知の構造そのものはポランニーの中では変わることがなかった。

したがって、『暗黙の次元』においては、ほとんど同じことを別の表現を使って説明している。顔の識別の例で言えば、顔の諸細部を第一項ないしは近接項と呼び、顔全体の特徴を第二項ないしは遠隔項と呼んでいるが、ポランニーによれば、顔を識別するとき、「我々は顔の諸造作から顔へと注目している」（TD：10／二四）はずである。しかし、我々は、遠隔項たる顔全体を認識するのに、目や鼻、輪郭、睫毛といったどんな諸細部をどのように統合したのかという近接項に関する知識を実際に全て語り尽くすことはできない⁶。なぜなら、「我々は諸細部に基本的には注目していないから」（TD：18／三五）である。ポランニーも「我々が語ることができないのは、近接項に関する我々の知なのである」（TD：10／二四）と述べているように、この語りえぬ近接項に関する知こそが、いわゆる暗黙知なのである。暗黙的に諸細部ないしは近接項に注目し、そこから明示的な全体的意味ないしは遠隔項へと注目を移してゆくことから、このような知の在り方を「からへ（from-to）」の構造と呼んだりしている。暗黙知とは「これらの二つの項が結合して構成する包括的存在を理解すること」であり、その場合、「近接項とは、この[包括的]存在の諸細部（the particulars）を表している」（TD：13／二八）のである⁷。

ポランニーは、このことを知の「究極的な装置（the ultimate instrument）」としての身体と絡ませ、さらに議論を拡大させてゆく。

……あるものを暗黙知の近接項として機能させるとき、我々はそれを自分たちの身体の

6 ここには『個人的知識』における「分画化の二つの欠点」と呼ばれるものがある（PK：90／八三）。諸細部を明示化することと諸細部間の関係を明示化するという二つの点で、位相が異なる分画化の限界がある。

7 諸細部の統合プロセスが暗黙的でしかありえないがゆえに科学的発見は可能となる。科学的発見とは、実在の一部を表すデータや先行研究、資料といった近接項を従属的に感知して、それらを統合し、新たな包括的存在（意味）としての実在（の一側面）を形成することであるが、このプロセスを明示化しえないがゆえに、科学的発見のためのマニュアルを作成しえないのであるし、科学的発見はあくまでも個人的なものにならざるをえないのである。「科学的研究は、一つの連続した暗黙的な統合行為である」（KB：82／一〇四）。量子論のマックス・プランクや天文学のケプラーらが、既存の資料やデータを利用してはいたのに、彼らのみが（個人的に）大発見に至ることができた理由はそこにある。「……我々は既知のデータを見るべきであるが、それ自体ではなく、むしろ未知なるものの手掛かりとして見るのである。つまり、それについての手助けおよびその一部として見るべきなのである」（PK：127-8／一一八）。

内部に合体 (incorporate) させ、あるいはそれを包含するように自分たちの身体を拡張し、そうすることで我々は、その中に潜入するようになるのである (TD: 16/三三)。

ポランニーは視覚障害者の白杖をよく例に用いるが、白杖を使用して視覚障害者が歩行するとき、はじめは掌や指に白杖の衝撃を知覚していたものが、慣れてくると、白杖の先を通じて地面の様子を直接触れているかのように感じ取ることができるようになる。つまり、自らを近接項たる白杖に「潜入」させ、それを身体で統合し、そうすることで「身体を拡張」させ、遠隔項たる地面の様子という全体的な意味 (包括的存在) を構成しているわけである。「道具や探り針を我々が従属的に感知するということは、今やそうしたものを我々自身の身体の一部を構成するものにする行為と見なしうる。……我々は自分自身をそれらの中に注ぎ込み、我々自身の存在の一部としてそれらを同化させている。我々はそれらの中に潜入することによって、それらを存在的に受容する」(PK: 59/五五)。まさしく白杖の使用を体得したのであり、当然ながら白杖は身体と実際に融合することはないのだが、白杖そのものは暗黙的にしか意識されなくなっており、明示的に意識されているのは白杖の先の感覚となるのである。このように、様々な近接項を身体内で統合し、遠隔項たる包括的存在へとまとめ上げるとのことこそ、「知る」ということであり、このとき、近接項は既に統合されてしまっているので、それについては対自的には明確に語りえず、したがって暗黙知と言われるのである。

逆に、統合されていた遠隔項への注意を、諸細部に向けてしまうと、全体的意味としてのそれまでの包括的存在は霧散してしまう。「ある把握の従属的要素を焦点的に認識することは、一つの新たな経験であり、大抵は危険な行為である」(PK: 115/一〇七)。このことは、指や目や足の動きといった諸細部を暗黙的に統合してピアノ演奏という全体的な意味を構成していたのに、指や目や足の動きという諸細部を明示的に意識した途端にピアノ演奏ができなくなることを想起すればよい。「包括的存在の諸細部を非常に細かく吟味すれば、それらの意味は消え去り、我々の [包括的] 存在に関する概念は破壊されるであろう」(TD: 18/三六)。つまるところ、諸細部たる近接項への感知と包括的全体たる遠隔項への感知は明示的には両立しえないのであり、『個人的知識』での表現を借りれば、従属的感知と焦点的感知は「相互に矛盾し合う (mutually exclusive)」(PK: 56/五二-三) ののである。したがって、諸細部と全体に対して同時に注目することはできず、全体に対してのみ注目し、諸細部に対しては暗黙的にのみ感知することによってはじめて包括的全体としての意味を理解することができる。統合されていた諸細部に注意を向け、対自化させることを「外化ないしは疎外 (exteriorize or alienate)」とポランニーは呼ぶが、「疎外することによって、その意味を破壊する」(KB: 146/一八七) ことになるのである。もちろん、再度、諸細部を明示的に意識するのを

止め、暗黙的に意識して、それらの近接項を統合し、ピアノ演奏という遠隔項に注意を向ければ、全体的意味としての包括的存在を取り戻すことができる。

重要なことに、ポランニーはこの「諸細部の暗黙的な再統合 (tacit reintegration of particulars)」に加えて、「明示的な統合 (explicit integration)」によっても全体的意味としての包括的存在を回復することができる⁸と述べる。例えば機械は、部品という諸細部に分解されても、技師は部品たる諸細部そのものおよび諸細部間の関係を全て知悉しており、それらを組み立てて、作動する機械という包括的存在を再構成することができる。これは諸細部、および諸細部と包括的存在との関係性について、技師が明示的に知っているがゆえに可能となるのであるが、極めて重要なことは、「一般的に、明示的な統合は暗黙的な統合に取ってかわることはできない」(TD:20/三八)ということである。

これは至極当然のことであろう。指、目、足、呼吸、肩、腰といった様々な諸細部を統合してピアノ演奏という包括的存在が形成されているが、どのように指を、目を、呼吸を、肩を作動させればよいか、明示的に意識してピアノを演奏することはできないからである。それら諸細部を暗黙的に身体の中で統合しているがゆえに包括的存在としてのピアノ演奏が成立しているのである。このことを鑑みれば、「からへ (From-to) の構造は、道に沿って歩くことから綱渡りをする⁸ことまで、結び目を結ぶことからピアノを弾くことまで、あらゆる熟練を要する行為を含んでいる」(M:36)ということになるのであり、「暗黙的思考は全ての知の不可欠の一部を成している」(TD:20/三八)と言わねばなるまい。ピアノ演奏に関する諸細部をある程度は明示化しようとしても、それが可能なのは暗黙知によって既にピアノ演奏が成立しているがゆえにである。全体的・包括的存在は完全に諸細部に還元することはできないのであり、全てを諸細部に還元し、その関係性を明らかにすることが近代科学の至上命題であったとするならば、それは知そのものを崩壊に導くことになるのではないかとポランニーは危惧していた。「諸細部の明示化によって引き起こされたダメージは、回復不可能となるかもしれない。細部に亘って詳述することで、歴史、文学、哲学のような問題は回復させられるどころか、不可解なものにされてしまうかもしれないのである」(TD:19/三七)。

このように、ポランニーは、暗黙知の理論を提起することによって、包括的存在ないしは意味というものは諸細部に還元することはできないということを示そうとしていた。それが正しいとするならば、諸細部の統合によって創発される包括的存在は、諸細部の単なる集塊ではなく、諸細部よりも次元が異なっているはずであり、もっと言えば

8 ただし、目的を有する（故障という概念のある）機械は、生命と同じく、物理・化学には還元できないことに留意せよ (PK:328-31, 359-61/三一-二-五, 三三九-四〇, SOM:47-8/四六-五二, KB:230-1/二九四-五)。

上位レベルの存在になっていると考えられる。ポランニーによれば、この階層性構造こそが「我々の身体が我々の精神に関係するときのポイント」(KB:214/二七三)となるものであった。いくつかの単語(近接項)を従属的に感知し、暗黙的に統合して、上位レベルである文章の「意味」(遠隔項である包括的存在)を我々が焦点的に理解するように、精神とは、感覚器官や神経や脳、筋肉などを通じて従属的に感知したものを暗黙的に統合して形成される身体の諸細部の「意味」であり、物理的な感覚器官や筋肉などよりも上位レベルにあるものである。したがって、下位レベルの物理的な感覚器官や筋肉などを明示化して分析することによっては、上位レベルの「精神」を理解できない。下位レベルの単語それぞれをどんなに調べても、その統合体である上位レベルの文章の意味を理解できないのと同じである。「包括的存在を特徴づける上位の原理は、包括的存在の諸部分それ自体に適用される法則によっては定義されえない」(KB:217/二七八)。ポランニーは、この階層性を提起することによって、人間の精神を下位原理である物理・化学的現象に還元しようとする唯物論的近代科学を否定し、人間の自由意思や責任というものを再度取り戻し、人間の全体性を回復させようとしていた。それは、スターリニズムやナチズムの如き人間の自由意志や責任の放棄を迫る体制への嫌悪と結び付いていたのであり、ポランニーの暗黙知論が、単なる純粹哲学ではなく、そうした全体主義批判という現実的問題意識を常に基底に有していたということは忘れられるべきではない。

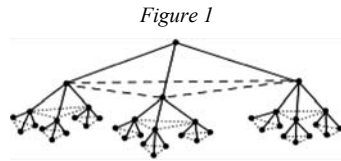
そうであるならば、同じ全体主義批判の基礎理論として提示された『自由の論理』における市場システム論が、後のこうした暗黙知論と思考様式として共鳴しあっていたとしてもおかしくはあるまい。その点について節を改めて論じよう。

Ⅲ 自生的秩序とコーポレート秩序

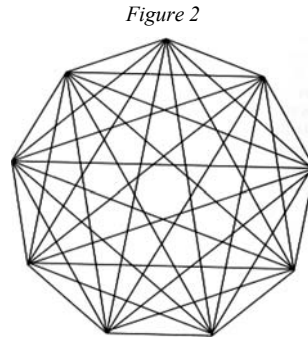
ポランニーは、一九五一年刊行の論文集『自由の論理』¹⁰で、計画経済の不可能性を二つの秩序モデルの対比を通じて論じていた。一つは「コーポレート秩序 (corporate order)」であり、これは、「長期に亘って、一団の人々によるフルタイムの諸活動を調整し、彼らに複雑かつ柔軟性のある仕事を実行するよう指令を出し、頻繁に各々が果たしている役割を割り当てし直すよう求めるような、特定の指令の形式」(LL:137-8/一四

9 『人間の研究』では「精神は人間の包括的な特徴である。それは、人間の特徴、発語、行動全体といった作用を我々が従属的に感知するときの焦点である。人間の精神は、人間の精神のそうした働きの意味である」(SOM:65/六六)と論じている。

10 『自由の論理』の成立過程については、齋藤俊明「自由の論理 (一) (二) ——マイケル・ポランニーの自由論」『法学新報』(第一〇七巻第三・四号、第一一〇巻第三・四号、二〇〇〇年-二〇〇三年)に詳しい。



（図の出典は LL : 146-7 / 一五一）



二) であり、図 (Figure 1) の如く、この指令を出すためにトップに一人の高級管理者を置き、その下に中間管理者、その下に一般構成員を配置することで、高級管理者は継続的に中間管理者に再指令を出して全体を運営してゆく。当然ながら、それは大企業や軍隊のような上意下達のピラミッド型の秩序となるだろう。反対に、運営に関わる情報は部下からの報告という形で伝達されてくるのだが、ここで決定的なことは、管理者は時々刻々と変化する情勢に対応するために指令を出し、そのための情報を報告として受け取るために、無数の部下を相手にするわけにはゆかず、ポランニーの見立てではおそらく三人から五人程度の「制御範囲 (span of control)」に限定付けられるであろうということなのである。トップの高級管理者のみが全体的・長期的問題を処理し、その他の人間は断片的な課題を上司の命令の範囲内で処理すればよい。

ポランニーは、このコーポレート秩序には「本質的限界」があるとし、以下のように指摘する。

集中的に指令されたコーポレーションに割り当てられた仕事は、それがトップの一人によって上手く統御されるためには、自然の統一性 (natural unity) を有していなければならない。それは一連の継起的な段階へと更に分割可能でなくてはならない (must be capable of subdivision) ……。[しかし、] 奥底まで自然の統一性を有しているような仕事は、更に分割することなど大抵は全くできない。詩と絵画、発明と発見は本質的に一人の作業である。他の仕事は、補助的な作業へと分割されうるが、大抵は、多数の継起的な段階へと繰り返し更に分割してゆくということには適さないだろう。したがって、コーポレートの組織は概して、密接に相互調整され、複雑で柔軟性のある働きをする限りは大きな規模へと成長することはないだろう (LL : 139-40 / 一四四)。

無論、巨大企業や軍隊といった比較的大規模なコーポレート秩序が現実存在しているが、それが上手くいっているとするならば、各構成員の自由がかなりの程度許された「相当に緩い集合体」(LL : 140 / 一四五) であるに違いない。しかし、上位者が部下の活動を決定的に規定しうるがゆえに管理責任が上位者に発生し、階層制が維持されうる

のであるから、コーポレート秩序においては、各構成員が各々自由に意思決定や行動をすることは原理的には許されえないはずである。そうした上意下達型のコーポレート秩序が何故大社会の構成原理として不適なのかと言え、大社会は企業の比ではない圧倒的多数の構成員を包含しているからである。そこでの秩序は、人間による管理の「制御範囲」を優に超えてしまっているため、各構成員の自律的な相互調整に基づく、極めて有機的なものとならざるをえず、こうした「自然の統一性」を前提にしているような大規模な秩序を「更に分割」して、各構成員を様々な階層や役割に人為的に割り当てようとしても到底不可能なのである。それを試みたとしても、先述のように各構成員の「制御範囲」に規定されるのであるから、大規模な秩序はこのやり方では原理的に管理できなくなる。

大規模な秩序を実現しうるのは、このコーポレート秩序と「相互に矛盾し合う (mutually exclusive)」関係にある「自生的秩序 (spontaneous order)」である。自生的秩序とは、集権的なコーポレート秩序とは異なり、図 (Figure 2) の如く示される高度に分権化された秩序であると言ってよい。それは、「長期に亘って、諸個人が自分たちのフルタイムの諸活動を相互に調整し合うような、自生的に秩序付けられたシステム」であり、「その結果として、それらの諸活動が複雑だが極めて適応的に相互調整される」(LL: 141/一四六) ようになる。ポランニーはこの自生的秩序を各構成員が相互に自律的に判断し、行動して、相互調整してゆくフットボールのフォワードたちの生み出す秩序に準え、それと対比させて、コーポレート秩序を各構成員が船長の指令の下で役割分担しているような船員たちの秩序に準えているが、言うまでもなく、コーポレート秩序の最たるものは計画経済であり、自生的秩序の「最も顕著」な実例は市場経済である¹¹。

11 周知の通り、この二つの秩序モデルの原理的な問題については、ハイエクなどによっても同時期に議論されていた。ハイエク、ポランニー、レプケなどの間における「自生的秩序」概念に関する思想的影響関係については、論旨から外れるのでここでは論じない。この点に関しては海外でも多くの議論がなされている。さしあたっては、Jacobs, S., "Michael Polanyi and Spontaneous Order, 1941-51." in *Tradition and Discovery: The Polanyi Society Periodical*, 24.2, 1997-8, pp.14-27. や Bladel, J. P., "Against Polanyi-centrism: Hayek and the Re-emergence of "Spontaneous Order". in *The Quarterly Journal of Austrian Economics*, 8, no.4 (Winter 2005), pp.3-18. などを参照。言うまでもなく、自生的秩序とコーポレート秩序というこの対概念自体、資本主義と社会主義という当時の経済体制観の思想的対立、特に後に述べるように一九二〇年代から始まる、いわゆる「社会主義経済計算論争」の問題意識を一定程度反映したものであったから、この二モデルの原理的提起それ自体が、ポランニーの独創というわけではない。もちろん現実的には、これらのコーポレート秩序と自生的秩序は、きれいに峻別されるものではなく、現実の社会では、コーポレート秩序たる企業組織においても自生的秩序の要素が部分的に含まれていることは言うまでもないし、コーポレート秩序は市場システムの全面的な代替物とはならないにしても、企業や政府などの小規模組織の秩序原理としては有効であるので (LL: 192/一九七-八)、市場システムとしての自生的秩序とは共存しうるし、ハイエクと同様、戦時などの非常時には自由社会の全体秩序がコーポレート秩序化されることもポランニーは認めていた。したがって、これらはあくまでも社会秩序の二つの理念型モデルであるにすぎない。

そもそもポランニーは、自身の最初の経済論である『ソ連経済論』(一九三五年)で、ソ連におけ

市場では、価格を見て各主体は相互調整を自律的に行い、それがまた価格に反映され、各主体は自らの決定をそれによって再調整してゆく。全体を統括する高級管理者のような者が存在しないので、人間による管理の「制御範囲」の限界に規定されることもなくなり、ほとんど無限に大規模な秩序を生み出すことができる。ここに「自生的秩序のシステムの巨大な量的優越性 (the immense quantitative superiority)」がある。こうした大規模な市場システムを政府当局が統制しようとするれば、「何千ものレバーを同時に操作するという作業が必要な機械を、一人で制御するように任された者の立場に置かれることになるだろう」(LL: 145-6/一五〇)。

留意すべきは、ポランニーが自生的秩序を擁護したのは、純粋に経済的な管理可能性の観点からのみならず、「公的自由 (public liberty)」という社会哲学的な観点からもそれが不可欠であったからだという点である。公的自由に対比されるのは「私的自由 (private freedom)」であるが、これは私的個人の及ぼす「社会的影響が、当局によっても、社会全体の世論の合意によっても、無視しうるものと見なされる」(LL: 193/一九九) ような範囲の自由である。公的・社会的影響を及ぼさない範囲の個人の「私的自由」は、私生活においても主人の支配下にある奴隷制などを除けば、全体主義体制下においても大いに認められている。したがって、私的自由の有無は決して自由社会か否かの指標とはならず、重要なのは、公的ないしは社会的に影響を及ぼしうる個人的な努力が大きく認められているか否か、つまるところ「公的自由」があるか否かなのである。『自由の論理』では自生的秩序の典型例として、先述の自由市場のシステムの他に、知的秩序の体系としての法（慣習法・判例法）のシステムと科学的自由のシステムが挙げられており、いずれも個人々の判断や行為が社会的ないしは公的な影響を及ぼしうるものであった。

こうした、個人の活動が公的ないしは社会的影響を有しうる、つまりは「公的自由」を実現しうる秩序の在り方こそが、自生的秩序なのであり、ポランニーの言うように「自由社会は公的自由によって特徴づけられるのだ」(LL: 194/二〇〇) とすれば、自生的秩序こそが自由社会の基柱であるということになる。

ㄨ る計画経済の理想が一九二一年の飢饉によって既に崩壊し、「私的資本主義にほとんど回帰した」と述べており、一九三一年六月に提起されたスターリン流社会主義は、一部に市場原理を取り入れたため、私的所有権が全面的に認められていないということ以外、「そのメカニズムにおいてはほとんど資本主義の経済システムと同じである」とまで述べ、理念型的な純粋統制経済モデルが最早現実には存在していないことを熟知していた (Polanyi, M., *Soviet Economics: Fact and Theory* (1935), in *The Contempt of Freedom: The Russian Experiment and After*, Watts & Co., 1940, p.84. 発表時の原題は *U.S.S.R. Economics: Fundamental Data, System and Spirit*. であり、若干の改定後に再録)。そして、ポランニーによれば、ソ連型の計画経済ですら、ある程度機能するためには実際には分権化してゆかざるをえなかったという。「そのようなシステムにおいては、諸事業は、地域的な資源と地域的な市場取引をできるだけ活用しうる管理者の効果的な指揮の下、自然と独立した諸単位に分かれてゆかざるをえない。そしてまた、そのことは集権的計画化とは矛盾するように思われる。実際、中央政府による地域事業の計画化はソ連ではほぼ形式的なものになっていた」(Ibid., p.84)。

人間の間で、彼ら自身のイニシアティブに基づいて互いに相互作用するのを認められることによって——彼ら全員に一律に適用される法にだけは従って——、秩序が達成されるるとき、我々は、社会における自生的秩序のシステムを有しているということになる。その場合、それらの諸個人の努力は、彼らの個人的なイニシアティブの行使によって相互調整されており、この自律的な相互調整は、公的な領域における彼らの自由を正当化すると言えよう。……他者が以前に同じ文脈でどうしていたかを各人が自らの行動において考慮に入れたときにのみ、個人的なイニシアティブの集合体 (an aggregate of individual initiatives) は自生的秩序の確立へと至ることができる (LL: 195-6/二〇一)。

ここでポランニーは公的自由の正当性を自生的秩序に求め、それが成立しうするためには、個人は、法、および各人の行動の過去の文脈としての伝統に従わねばならないとしている。この点はハイエクとも通底している¹²のであるが、何故個人は伝統に規定されねばならないのかと言え、多くの人々が参与する自生的秩序においては、相互に直接的に調整し合うことはできないため、「各個人は、他の人々の以前の活動 (the foregoing actions) から帰結している事態に自らを適応させる」(LL: 196/二〇一) しかないからである。こうした個々の主体を一定程度規定する「共同性的事態 (communal states of affairs)」を基底的に有するポランニーの市場システム論は、ハイエクと同様、アンドレ・オルレアン¹³の言う「市場参加者の厳格な独立性」を前提とするアトミスティックな一般均衡論的市場像とは異なってくることに留意が必要である。その意味では、市場の自生的秩序は、過去の判例や世論の動向と相互調整しながら法体系という秩序を自生的に形成してゆく (英米系の) 法システムや、過去の科学的成果や他の多くの科学者たちの世論と相互調整し、時には旧来の科学的知見を革新しながら、科学的真理の体系を自生的に形成してゆく科学のシステムと通ずる面があると言えようが、異なる面も多々ある。市場システムは「競争 (competition)」を主たる原理とするのに対して、法システムや科学のシステムといった知的システムは「協議 (consultation)」を主たる原理とし、特に科学のシステムは「競争」のみならず、自説を公開討論に付して他を圧倒する「説得 (persuasion)」という原理も伴っているし、知的システムが「協議」を原理とする以上、判事や科学者といった専門家の意見が重要となるが、市場システムは経済活動を評価する専門家の基準というものがなく、消費者が満足したか否かによってしか判断され

12 よって、同じ自生的秩序の一つである法システム (慣習法・判例法) はもちろんのこと、科学のシステムにおいても伝統は重要な規範的役割を有している (SFS: 51-2/九四-六)。そもそもポランニーは、人間の知は大いに伝統的枠組みに依拠していると考えていた。「話すことを学ぶとき、全ての子供は、生まれた集団のイデオロムに根差す、宇宙の伝統的な解釈という前提の上に構築された文化を受容する。教育された精神の全ての知的努力は、この参照枠の内になされるであろう」(PK: 112/一〇四)。

13 一般均衡論が論理必然的に前提することになるアトミスティックな人間観については、アンドレ・オルレアン『価値の帝国——経済学を再生する』(坂口明義訳、藤原書店、二〇一三年)第二章を参照。ミクロ経済学の観点からの同様の指摘については、荒井一博『信頼と自由』(勁草書房、二〇〇六年)も参照。

えない。

このように、市場システムと知的システムは全く同じというわけではないのだが、ポランニーは、特に科学のシステムの自生的秩序を重視しつつも、この自生的秩序という思考様式そのものの淵源が市場システムであることを認めている。

この論考では、これまで、自律的相互調整の概念——アダム・スミス以来、市場において作用するものだと知られている——を知的領域における他の様々な諸活動に拡大し、こうして互いに類比された経済的システムと知的システムの間の関係性を明らかにすることをテーマとしてきた。私が前に示したことは、相互調整によって自生的に達成される課題は、コーポレート体を通じて意図的に行うことはできないということである（LL:208-9/二一四）。

ポランニーが、市場システム論に関する経済学的思考様式から多くの知見を得ていることは明らかであろう。例えば市場システムの構造を表す「多中心性（polycentricity）」の問題も、明確に科学者の共同体の秩序原理と重なり合わされてゆく。多中心性の問題¹⁴について言えば、大社会における市場システムのように、中心となる多くの主体が相互調整の関係にある場合、ある変化が起きると、他の主体と関連して各主体も変化するので、その動きは連立方程式の解として決定されるのであるが、当然、主体が比較的少ない場合（少中心性の場合）にしか厳密に計算することはできない。そこでポランニーは、多中心的課題の計算を解くのに数学者団を用い、各数学者は一つの中心に関してのみ計算し、その結果を数学者団全員に知らせるとすれば、その結果を基に各数学者は再度自らの受け持つ中心に関して計算し、それらが数回の継起的ステップを経れば、多中心的課題を計算することができると想定する。それであれば、各数学者は多中心的課題の全体を把握せずとも、一つの中心に関する計算に当たればよい。即ち、ここで前提とされているのは、バークやハイエクらの人間理解の根本の一つである人間の知的限界性という視座であると言ってよいだろう¹⁵。ポランニーが科学的見解の形成を自らの狭い専門領域しか理解していない科学者同士のわずかに重なり合った専門領域の連鎖によるも

14 ポランニー自身、「自律的相互調整の過程によって、個々人の科学的努力が最高度に相互調整されうるということについて私がここで述べてきたことは、市場において活動している生産者と消費者によって達せられているという自律的相互調整を思い起こさせるかもしれない。実際、独立したイニシアティブの相互調整を最大限の科学の前進へと導く『見えざる手』について私が述べたとき、念頭にはこのことがあった……」（KB:51-2/六六）と述べているように、科学的自由は経済学的秩序観と結び付いていた。こうした自律的相互調整に関する類似の考察は、分権的な「一般的権威（General Authority）」と集権的な「特定の権威（Specific Authority）」の問題として『科学・信念・社会』にも見られるが、そこでは「一般的権威」に属するものとして、科学や法に加えてプロテスタントが挙げられているが、市場は挙げられていない（SFS:59/一一〇—一一一）。

15 ポランニーはソ連の統制経済をこの人間の知的限界性の観点からも批判していた（Vinti, C., Polanyi and the 'Austrian School', in *Emotion, Reason and Tradition: Essays on the Social, Political and Economic Thought of Michael Polanyi*, edited by Struan Jacobs and R. T. Allen, Ashgate, 2005. 特に注13を参照）。

のだと論じたのも¹⁶、科学的見解の自生的形成、その多中心性を踏まえ、科学者が全領域の知悉者たりえないことを明白な前提としていたからである。「科学的意見というものは、誰か一人の人間の精神に抱かれた意見なのではなく、何千もの断片に分けられて、多くの諸個人によって抱かれた意見なのである」(KB:56/七一)。

極めて興味深いのは、ポランニーによれば、「広義には、我々は、多数の要素のバランスをとるといふ問題全てを多中心的な課題であると考える」(LL:216/二二〇)ことができるのであり、先程の数学者団の「自生的相互調整」は、多数の主体が参加し、価格をもとに相互調整しあう市場システムの在り方であるのはもちろんのこと、生命、有機体の在り方でもあったということである¹⁸。つまり、市場と生命は、「自生的相互調整」を通じて多中心的課題を解決するシステムとしては同根なのである。「この種の多中心的な課題の解決は、生物、特に動物に特徴的な能力」であり、「有機体は、それが統合的 (jointly) に考慮に入れている全ての『諸中心』からやってくるようなインパルス¹⁹の全範囲に対して反応し、バランスを達成」(LL:217/二二一)しているのである。言い換えれば、身体を通じて得られた多々あるインパルス (神経衝撃、刺激) を統合して、「バランス」という一定の秩序を紡ぎ出すことは、まさしく多中心的な課題の解法に他ならない。「有機体は、それらの統合された意義 (joint significance) を——反射的にせよ意識的にせよ——評価し、そのように導かれて、多中心的な課題を解決する」(LL:217/二二一) わけである。

ここで我々は、市場システムの問題と先述の暗黙知の問題が、思考様式として基底的に結び付いていることに気付くことができるだろう。

IV 暗黙知論と市場システム論の論理的関係性

ポランニーにおける思索の変遷は、先述の通り、医学や物理・化学といった自然科学から、市場システム論や計画経済批判に関する社会科学 (政治経済論) へ、そして宗教や芸術をも包含する壮大な人間の知に関する暗黙知論へという三段階によく分けられる

-
- 16 「隣接領域重複の原理 (the principle of overlapping neighbourhoods)」については、『科学・信念・社会』(SFS:48-9, 63/八七-九, 一〇-一), 『個人的知識』(PK:216-8/二〇二-四), 『知と存在』(KB:54-6, 84/七〇-二, 一〇六), 『意味』(M:191-2) などで繰り返し論じている。
- 17 科学的共同体は自生的秩序であるが、その秩序原理の一つである「隣接領域重複の原理」の前提となることは、「近代科学はあまりに広大なので、いかなる単一の個人もその小部分だけしか適正に理解できない」(PK:216/二〇二) ということ、つまりは人間の知的限界性であった。
- 18 当然、「中心的権威」(SFS:51/九二) の存在しない自生的秩序たる科学的共同体も「一つの有機的存在 (an organic entity)」(SFS:49/八八) を形成している。
- 19 言うまでもないが、『個人的知識』において論じられた、生命における「協同的に働くときの全ての部分の等能的統合」(PK:342/三二五) という側面と通ずる視座であろう。そして、ポランニーは明確に「等能的に働く調整過程……は、暗黙的に知ることによって諸細部を統合することに類似している」(TD:44/七一) としている。

が、政治経済論と暗黙知論の関係性についてはほとんど討究されてこなかった。もとよりポランニーの暗黙知論に比して政治経済論が海外でも軽視されており、それが政治経済論と暗黙知論の関係性を討究するということの遅れに繋がった一番の原因であつたらう。

無論、ポランニーにおける政治経済論と暗黙知論の関係性を論じようとした研究者がこれまで皆無であったというわけではない。実際、ドン・ラヴォア²⁰や佐藤光²¹は、社会主義経済計算論争を意識しつつ提起された『自由の論理』における多中心的課題の三種の形式性という視座を後の非形式的な知としての暗黙知論と接続させることで、先駆的にも中期と後期のポランニーを架橋しようとしていた。社会主義経済計算論争とは、社会主義国の計画経済体制が合理的な計算によって運営可能かという論点を巡って、一九二〇年頃から本格的に社会主義派と反社会主義派の間で戦わされるようになった論争であるが、次第に新古典派、オーストリア学派、マルクス派入り乱れて、非常に幅広く興味深い議論が行われるようになっていた²²。一九二〇年にミーゼスが「社会主義国における経済計算」という有名な論文を発表し、私有財産制と市場（価格）メカニズムなしに、資源を合理的・効率的に配分することは不可能であると論じて²³、「社会主義経済学の中心的な問題を初めて定式化し²⁴」、続いてハイエクが、経済計画を立案する中央当局にと

20 ドン・ラヴォア『社会主義経済計算論争再考——対抗と集権の計画編成』（吉田靖彦訳、青山社、一九九九年）一六六―七頁。

21 佐藤光『マイケル・ポランニー「暗黙知」と自由の哲学』六二―六四頁。

22 論争全体については、西部忠『市場像の系譜学——「経済計算論争」をめぐるヴィジョン』（東洋経済新報社、一九九六年）に詳しい。また、橋本努はマルクス派も一枚岩ではなく、市場社会主義と正統派マルクス主義に分けるべきだとする（橋本努『自由の論法——ポパー・ミーゼス・ハイエク』創文社、一九九四年、第三章）。ポランニーも社会主義派の変質については感知していた（LL: 150-5/一五六―六〇）。

23 この論文でミーゼスは社会主義的公有企業の「責任と独創性」の問題を提起するなど重要な諸論点について論じており、後の社会主義国の経済問題とされるものの多くを先取りしていた。ミーゼスは「単純な状況下においてのみ、経済学は貨幣計算をなくしうる」と述べ、なぜなら、「閉じられた家政経済という狭い制限の中においては、最初から最後まで生産過程を綿密に調べ上げ、どちらの処理方法がより多くの消費財を産み出すのかということについて常に判断することが全くもって可能であるが、こうしたことは、とてつもなく複雑化している我々自身の社会経済環境においては最早不可能である」からだとしていた（Mises, L. V., *Economic Calculation in the Socialist Commonwealth* (1920), translated by S. Adler, Mises Institute, 1990, pp.15-6.）。後のハイエクによる大社会（Great Society）の議論や、複雑かつ大規模な大社会の運営に関わる膨大な情報を我々人間は集約して処理することはできないという、人間の知的限界性に関する周知の議論にも繋がる論点の萌芽をここに見ることもできよう。ミーゼス曰く、「一人の人間の精神のみでは——それがどんなに狡猾なものであっても——弱々しすぎて、無数にある高次の財の中からどれか一つの財の重要性を把握することもできない。どんな単一の人間も、非常に多くある生産の可能性を全て知り尽くすことはできないし、何らかの計算システムの助けなしには価値について直接明確な判断を下すこともできない。経済財の生産労働に参与し、経済財に経済的な関心を寄せている人々から成るような共同体で、経済財を管理統括することを多くの個人に割り当てることは、ある種の知的な分業（intellectual division of labor）を伴うであろうが、このことは生産を計算する何らかのシステムなしには、つまりは経済なしにはありえないであろう」（*Ibid.*, p.17.）。

24 Hayek, F. A. *Individualism and Economic Order*, The University of Chicago Press, 1948, p.143.〔西山・矢島監訳『新装版ハイエク全集』第三巻、春秋社、一九九七年、一九〇頁〕

って必要なデータは局所的なものであるから、それらを全て集約することは不可能であり、仮にそうしたデータが集められたとしても、それらを計算する作業は想像を絶する膨大なものになってしまい、困難となるだろうと論じた。ポランニーは、そうした計画経済における知的な側面からの処理不可能性のみならず、知的な側面からの処理不可能性をも提起することによって、この論争に貢献しようと考えた。ポランニーによれば、多中心的課題は形式化できるもの、全く形式化できないもの、そして理論的には形式化できるものの三種があるとし、社会主義的計画経済がそもそも実行可能に思えたのは、経済問題が理論的に形式化可能な問題であったからである。つまり、「全体として市場経済によって果たされている機能に関して数学的なモデルが提示可能であるという事実こそが、経済システムはこのモデルを構成する一連の連立方程式を解くことによって集権的に管理されるのだという観念をかつて力付けていたのである」(LL:222-3/二二六)。経済問題はあくまで理論的にのみ形式化するものなのであるから、「経済システムに含まれる選択の体系を明らかにするときに有益となる理論モデルは、実際にそれらの選択の結果を計算するのには使えない。なぜなら、『所与のデータ』を表す記号は、ほとんど数字上の意義を持たないからである」(LL:223/二二六)。ちょうど、「管理上のスキルが……数学的計算に置き換えられない」(LL:223/二二六)ように、中央当局が経済を管理運営するに当たって不可欠となる知識のほとんどが、数値化や統計化に馴染まない性質のものであるがゆえに、効率的な集権的計画経済というものは実現しようがないのである。ここに後の形式化・明示化しえない暗黙的な知の在り方を論じたポランニーの暗黙知論の萌芽を読み解くことは可能であろう。²⁵ラヴォアも指摘しているように、「計算議論の基本点は、客観的な生産可能性の必要な知識が競争的市場過程なくしては利用できない」ということにあるのであり、そうであるとするならば、後の「認識論や科学哲学に対するマイケル・ポランニーの貢献はこれとの関連で非常に価値がある」と言える。²⁶このポランニーにおける『自由の論理』での形式性の議論が、後

25 注23で指摘したようなミーゼスが仄めかした知識の観点から計画経済を批判するという論法は、その後、ハイエクによって意識的に展開されたが、ハイエクも当初は知識の分散性という観点から知識の集約不可能性を導出して、集権的計画経済を批判していたのであって、知識の暗黙性については、無視してはいないけれども、さほど重視してはいなかった。その点を詳しく論じているフリートウッドによれば、ハイエクがポランニーやG・ライルから知識の暗黙性を積極的に学ぶようになったのは一九六〇年代からだと言う(Fleetwood, S., *Hayek's Political Economy: The Socio-economics of Order*, Routledge, 1995. [佐々木・西部・原訳『ハイエクのポリティカル・エコノミー——秩序の社会経済学』法政大学出版局、二〇〇六年)の第七章を参照)。もっとも、ポランニーも社会主義的計画経済批判において明示的に暗黙知論を適用しているわけではなく、ポランニーが暗黙知論を明確に提示し始めるのは一九五〇年頃からで、特に一九五一年から翌年にかけてなされたアバディーン大学でのギッフオードレクチャーあたりからである(Mitchell, M. T., *Michael Polanyi: The Art of Knowing*, ISI Books, 2006, pp.59-60.)。これは後の主著となる『個人的知識』(一九五八年)のもととなった重要な講義であるが、それでも「暗黙知」という言葉自体はほとんど出てこない。

26 ドン・ラヴォア『社会主義経済計算論争再考』一一六頁。

の暗黙知論に繋がるというのは、彼の政治経済論と暗黙知論の関係性を探る上で非常に重要なポイントとなるであろうが、ラヴォアがそのことを三〇年も前に鋭く示唆してから、それ以外の論点から政治経済論と暗黙知論を架橋しようとする試みはほとんどなされてこなかったと言ってよい。

しかし、近年、その点を別の観点から——特に論理的な共通性、思考様式の共通性という観点から——明らかにしようとする研究が進みつつある。

例えば R・W・ムーディによれば、ポランニーは「物理的ツールと概念的ツールとの類似性」²⁷について提起しており、一九三六年にマンチェスター大学の化学系スタッフとともに、水をチューブやピーカーで流し、経済の動きを可視化させる物理的なモデルを製作したり、一九三八年には経済的事象を視覚的に示すためのアニメーション映画を公開したりしていたが、ポランニーの狙いは、こうした物理的なモデルを通じて、つまり、それに「潜入」することで、遠隔項としての「経験的実在」に迫ろうとするものであり、ここに暗黙知同様の「からへ」の構造があったとする。自生的秩序とコーポレート秩序という先述の秩序モデルも、当然、近接項としての「概念的ツール」であり、「物理的ツール」と同様、それに「潜入」することによって「経験的実在」に迫ると同時に、自らにとっての理想的な秩序とそうでない秩序を描く規範的なメッセージをも担わせていたとする。

こうしたムーディの議論は形式的かつ表層的な類似性に留まっている嫌いがあるが、R・T・アレンなどはもっと本質的な関係性に迫っている。アレンは「二重制御 (dual control)」こそがポランニーの後期哲学の中核であったとし、²⁸ 政治と経済の関係もその観点から説明できるとする。二重制御の問題とは、細部は細部を制御するルールに支配されると同時に、それより上位レベルの包括的存在を制御するルールにも支配されるのであり、その帰結として、上位レベルの包括的存在を制御するルールは、細部を制御するルールには支配されえないし、説明もされえないという考え方である。『個人的知識』や『暗黙の次元』、『知と存在』などを通じてポランニーはこのことを様々に説明しているが、例えば、文章が統合されて文学作品が形成されているとして、そのとき文章は自らを統べる文法のルールに規定されていると同時に、上位レベルの文学作品を統べる文芸批評のルールにも規定されているはずであり、二重の制御を受けている。当然、文章にとって上位レベルの包括的存在である文学作品が、下位レベルの文章を制御する文法のルールに規定されるはずがないとは言うまでもない。文法的に正しいものが全て文学作品だというわけではないのである。ポランニーはこれを指摘することによっ

27 Moodey, R. W., *The from-to structure of political and economic thinking*, in *Freedom, Authority and Economics: Essays on Michael Polanyi's Politics and Economics*, edited by R. T. Allen, Vernon Press, 2016, p.122.

28 Allen, R. T., *A Polanyian account of the relations between politics and economics*, in *Freedom, Authority and Economics*, p.135.

て、包括的存在である人間が細部を制御する物理・化学のルールによっては説明されえないことを示し、人間の全体性を回復させようとしたのであるが、アレンは、この二重制御の問題を政治経済論に応用し、ポランニーはマルクス主義の経済還元論に反対して、経済活動を下位レベルと捉え、上位レベルの包括的存在として政治を捉えていたとする。経済活動は経済そのもののルールに規定されると同時に、政治という包括的存在のルールにも規定されるのであり、政治と経済の関係を暗黙知の構造で捉えられることを指摘した。しかし、そうした政治と経済の暗黙知的関係性についての議論ではなく、暗黙知論と経済論の論理的関係性を問うている本稿に関連して言えば、アレンの重要な貢献は、ポランニーの見方を敷衍すると「社会」も「一つの全体的・包括的存在 (one total and comprehensive entity)²⁹」であると見なすことができると示唆した点にある。

アレンの言うように、社会を統合された包括的存在であると捉えれば、ポランニーにおける自生的秩序とコーポレート秩序という二つの対照的なモデルは、言わば、二つの社会統合の仕方なのであり、暗黙知論における「諸細部の暗黙的な再統合」と「明示的な統合」という二つの統合形態に符合するものであったと言える。つまり、先述の通り、コーポレート秩序は「自然の統一性」という包括的なものを「更に分割」せねばならず、その分割された各部分を更に「特定の作業として一人の人間に割り当てることが可能」(LL:139/一四四)でなくてはならないため、他との相互調整はその人の「制御範囲」に規定されざるをえない。したがってコーポレート秩序は大規模化しえないのであるが、端的に述べれば、包括的存在たる「社会」を分割し、相互調整過程を人間にとって把握しうる「制御範囲」へと分節化 (articulation) する、つまるところ、近代科学、そしてその鬼子たる社会主義が基柱としてきた要素還元主義的思考の産物なのである。各経済主体への指令は、包括的存在としての経済社会を構成していた下位レベルの諸細部へと「注意を向ける」ことに他ならず、それによって、上位レベルの包括的存在としての自由な経済社会は——指や目の動きといった諸細部に注意を向けることで、ピアノ演奏という包括的存在たる「意味」が崩壊したように——崩壊するであろう。アレンの述べる通り、「コーポレート秩序を一つの包括的存在と解するのは問題がある」³⁰のである。

それとは逆に、自生的秩序とはまさしくポランニーの提起した反要素還元主義的秩序、即ち、諸要素 (多中心) の暗黙的「統合」を成し遂げる創発的な秩序であった。³¹そ

29 Ibid., p.143.

30 Ibid., p.141.

31 興味深いことに、『意味』では、諸個人の織り成す自生的な相互調整システムの変化を、端的に、継起的な「意味 (meaning) の達成」(M:207)としても描いている。諸個人の行為を非意図的に統合するような、「相互調整によって自由に発達した秩序付けられた総体 (ordered wholes)」(M:204)である自生的秩序は、アレンの言うように、一つの包括的存在、つまりは「意味」であったのであり、この相互調整のシステムは、再帰的に相互調整過程そのものに影響を与えてゆくから、「相互調整のシステムは、

ここでは各人は、独立して競争的に活動するが、価格や慣習によって自生的に相互調整されるので、諸中心間の相関関係の細部や秩序の全体については知る必要はなく——当然知ることもできないのだが——、そのため、市場の統合過程は特定の人間の「制御範囲」に囚われなくても済むようになり、先述の通り、「巨大な量的優越性」をもつことができる。したがって、自生的秩序は、市場過程、つまりは多中心間の相互調整過程を明示的に把握する必要がないために、ポランニーが述べたように「『見えざる手（“invisible hand”）』によって確立された秩序の原型」（LL:196/二〇二）となるのである。換言すれば、自生的秩序とは、暗黙的に（まさに明示化されぬ「見えざる手」によって）各個人の自由な活動が統合されて「一つの集合体（an aggregate）が形成される」（LL:197/二〇二）という秩序であり、これは言うまでもなく諸要素の統合による包括的存在の暗黙的形成という暗黙知の基本構造の考え方に他ならない³²。

だからこそ、ポランニーにおいては、自生的秩序たる市場と同様、有機体も、様々なインパルス³³を統合して「バランス」という秩序を形成することで多中心的課題を処理するものとして描かれたのである。再度『自由の論理』の最終章から引用しておこう。

……広義には、我々は、多数の要素のバランスをとるといふ問題全てを多中心的な課題であると考えてあろう。座ったり、立ったり、もしくは歩いたりしている間、我々に平衡（equilibrium）を保たせてくれる姿勢反射システムは、非常に複雑な多中心的課題をやっている。……それら全ては数学的に形式化できない多中心的課題である。

この種の多中心的な課題の解決は、生物、特に動物に特徴的な能力である。最低のレベル

-
- 、意味のさらなる高い水準へと動いていくので、絶え間ない流れの中に在らねばならない」（M:207）とされていた。自由社会の歴史とは、まさしく「この絶え間ない再帰的調整システムの進歩」のことに他ならず、この過程全体を見晴らすかのような全知的主体たりえない人間存在は、本性上、マルクス主義が想定したようには社会を統制することも歴史を予言することもできない。ポランニーの言葉を用いれば、「歴史の流れを統御できない原因は、こうした人間の状況が抱えている論理にあるのである」（M:207）。逆に言えば、『自由の論理』にあるように、「そのような思い込みは、謙虚さ（humility）を欠いた視野の狭さを明らかにしているにすぎない」（LL:245/二四五）。ここに、本稿で論じてきたような、「個人的なイニシアティブの集合体」（LL:195/二〇一）としての自生的秩序、相互調整のシステムを、包括的存在としての「意味」と捉える視点が看取されよう。各主体の私的行動の単なる集塊が秩序ではなく、秩序は各主体の私的行為の集塊以上の「創発」の結果であるがゆえに、その方向性は予測しえないし、秩序を人間の意識的統御の下に置くこともできないのである。だからこそ、「概して、一つの集合体の諸単位間で、それらを好ましい秩序の仕方に配置するような相互作用はないであろう」（LL:192/一九八）と述べたのである。
- 32 自生的秩序とコーポレート秩序が、暗黙知論における「諸細部の暗黙的な再統合」と「明示的な統合」という二つの統合形態に符合するといふのであれば、その認知主体は誰かと思われるかもしれない。おそらく、こうした疑問は暗黙知を人間の知の問題に限定してしまっているがゆえに生じている。確かにポランニーは「三つ組構造（triad）」など認知主体を前提にした人間の暗黙知論を提起してはいるが、人間の認識の問題のみに暗黙知論を局限してはいなかった。ポランニーは暗黙知の原理を生命の発生や進化の原理にまで拡張し、「統合」の哲学を壮大な宇宙の原理として提起しようとしていた。「最初の創発によって生命は現れたのであり、それは続く進化のステージ全ての原型となる。それによって、より高次の原理をもつ生命の高等な形態が現れるのである。暗黙的に知ることによって達成される創出という拡大された概念の中に、私は、創発の全てのステージを含ませたのである」（TD:49/七八）。この拡大された概念としての暗黙知における認知主体とは何であろうか。

では、それはホメオスタシスないしは合目的活動の能力と同定できようが、その高次の形態は、人間の知的判断力 (man's power of intelligent judgment) を明らかにするものであろう。どの場合でも、有機体は、それが統合的に (jointly) 考慮に入れている全ての「諸中心」からやってくるようなインパルスの全範囲に対して反応し、バランスを達成する。有機体は、それらの統合された意義 (joint significance) を——反射的にせよ意識的にせよ——評価し、そのように導かれて、多中心的な課題を解決する。もしくは、いずれにせよ、この方向である程度の成功を取めるのである (LL: 216-7/二二〇-一)。

「多数の諸要素を多中心的に秩序付けるといふ課題が多中心的課題である……」(LL: 210/二一五)と定義するならば、市場も生物も、諸要素を一つの秩序へと「統合」することによって多中心的課題を見事に解決している。その最大の相違点は、生物におけるインパルスの統合は数学的形式化が全く不可能であるのに対して、先述の通り、「個人的なイニシアティブの集合体」(LL: 195/二〇一)である市場は、理論的には数学的形式化が可能であったという点である。社会主義経済計算論争という議論が成立していたのもそのためであったが、そもそも経済学における理論的形式化というものは、「現実には数値を求められない数学モデルの延長にすぎない」(LL: 226/二二八)のであり、その意味では、市場も生物も実際的な形式化は全く不可能な多中心的課題の解法であったと言ってよいだろう。だからこそ、触覚、視覚、聴覚等々からの様々なインパルスを統合して「バランス」という包括的な秩序を生み出して「歩いたり」、それらのインパルスを統合して「意義」(意味)という高次の包括的存在を生み出して「評価」したり、「知的判断力」を行使したりすることも、結局は「形式化できない」——暗黙的な——ものであらざるをえなかったのであるし、また、価格によって「巨大な自己相互調整システムの中で一単位の各決定が多数の他の単位に対する関係を再調整する」(LL: 145/一四九)ようになることで多中心的課題が処理され、各経済主体(「諸中心」)が秩序だって統合されている市場の自生的秩序も、実際には形式化・明示化不能の「見えざる手」の産物として描かれざるをえなかったわけである³³。その意味では、諸

33 ポランニーが、「自律的相互調整の概念」は「アダム・スミス以来、市場において作用するものだと知られて」おり、この「相互調整によって自生的に達成される課題は、コーポレート体を通じて意図的に行うことはできない」(LL: 208-9/二一四)と述べるとき、「見えざる手」の実現する市場秩序の自生性が、政府当局の明示的な見える手による人為的な(コーポレートの)秩序の意図性とは対照的に捉えられていることは言うまでもなからう。この非意図的な自生性と明示的な意志による意図性(ハイエクト的に設計性と言ってもよい)の対立は、後の暗黙性と明示性の対立と対応的なものであり、実際、晩年の『意味』などにおいては、ポランニーは「暗黙的」とほぼ同義的に「自生的」という言葉を用いている。例えば、ポアンカレの科学的発見を「想像力」と「自生的な統合過程 (spontaneous process of integration)」としての「直観」によるものだと論じ (M: 60)、さらには科学研究における「統合の能力の大部分は自生的 (spontaneous) なものである」(M: 96)と確言し、「焦点的に見た時に矛盾して見える諸要素の統合については……(知覚のように)ほぼ完全に自生的なものかもしれないし、(特に両眼による視界のように)想像力をほとんど必要としないかもしれない」(M: 133)と述べ、自生性の観点から暗黙知を考察していた。

要素（「諸中心」）たる各経済主体が織り成す多様な経済活動の「見えざる」——暗黙的——統合が生み出す「意味」こそが、「価格」に他ならないとも言えよう。ハイエクによって展開された複雑な社会状況に関する情報の集約的記号としての「価格シグナル」という概念は、そのポランニーの「統合」の哲学と共鳴しているとも考えることも不可能ではあるまい。³⁴

*

もちろん、ポランニーは暗黙知の理論を徐々に形成しており、『自由の論理』の時点においては明確な暗黙知の理論構成には達していなかった。³⁵したがって、『自由の論理』の中に、後の暗黙知論をそのまま確定的に見出すことはできない。しかし、『自由の論理』の最終章で、市場とともに、その後の仕事を予示するかのような、生物の多中心的な構造について論じていたように、ポランニーの中で、多中心性の問題や自生的秩序の問題が暗黙知の構造と思考様式として一定程度結び付いていたと考えるのは全くの不合理だというわけではないように思われる。この点は、ポランニーにおいて何故計画経済批判が必然的に暗黙知論へと導かれることになったのかということを考えるに当たって、重要な示唆を与えるように思われる。冒頭で述べたように、研究史的に言えば、ポランニーの経済論と暗黙知論の関係性については軽視されてきたと言えるのであるが、彼の暗黙知論が突然の思い付きなどではないとするならば、計画経済批判という政治経済論と暗黙知論との関係性（連続性）についての考察は、決して無視してよいものではないはずである。実際、それは要素還元主義批判、つまりは暗黙的統合、創発という基

34 ポランニー曰く、「市場を支配している価格体系は、経済主体が、相互に自分たちの行動を調整し合うときの光明となる情報を伝える（transmits information）のみならず、金銭の観点から経済活動を行うためのインセンティブをも与える」（KB：51／六七）。ハイエクと同様、ポランニーにとっても、価格メカニズムを通じた市場過程において情報が伝わるのであって、完全情報の仮定の如く、市場過程の前提に情報が置かれるのではなかった。

35 ただし、一九四六年の『科学・信念・社会』（SFS：24，33／三六，五四－五）で科学的発見を「統合」や「創発」という形で理解していたように、「暗黙知」という名称こそなければ、「統合の哲学」としての思考様式は、厳密化されてはいなかったものの一貫して存在していた。つまり、ポランニー哲学の通奏低音として、統合の哲学という思考様式は、『自由の論理』以前から存在していたのである。ポランニーは当初、『科学・信念・社会』と『自由の論理』をまとめた『自由の構造（*The Structure of Liberty*）』と題する論文集の刊行を準備していたように、この二冊を全く別の内容とは考えていなかった（齋藤俊明「自由の論理（一）」一八八頁）。この『自由の構造』において、「ポランニーは、市場の経済学に関する自らの分析と、科学の構造に関する自らの見解とを統合しようとしていた」（Scott, W. T. and M. X. Moleski, S. J., *Michael Polanyi: Scientist And Philosopher*, Oxford U. P., 2005, p.188.）。そして、注25の通り、暗黙知論の基本構造を全面展開した『個人的知識』（一九五八年）のもととなった講義が一九五一年から行われ、M・グリーンとこれについて一九五〇年に話したとその本の謝辞で述べているので、その頃にポランニーは暗黙知論を明確に提示するようになったと思われるが、暗黙知論に繋がる基本的な考え方については、一九四〇年代における自らの哲学研究において既に達していたようである（*Ibid.*, pp.187-8.）。多中心的課題と生物の問題について言及した『自由の論理』第十章の出典は、こうした暗黙知論の理論化に没頭していた一九五〇年に、*Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft* 誌に掲載された「経済的および知的自由（*Economic and Intellectual Liberties*）」であると推察され（齋藤俊明「自由の論理（一）」二一五－七頁）、内容も基本的には同じであるので、『自由の論理』の内容に、暗黙知論の構造が見受けられたとしても時期的には全くおかしくはない。

本的思考様式を明確に共有するものであったと言ってよい。その基本的思考様式は、『科学・信念・社会』や『自由の論理』では萌芽的なものであったかもしれないが、その後定まってゆき、最晩年の著書『意味』において宗教や芸術にまで適用され、一貫していた。³⁶むしろ、要素還元主義批判、即ち、「統合」の哲学を社会システムに応用したのが自生的秩序論であり、知に応用したのが暗黙知論であり、その思考様式こそがポランニーの哲学の本質であったと言っても過言ではない。それは、「人々をバラバラの算盤玉に還元」³⁷することで有機的全体としての社会秩序を破壊したとフランス革命を批判したエドモンド・バークの問題意識とも通ずる統体性の擁護としての保守的な思考様式ではあったが、ポランニーの近代科学批判、唯物論批判、自由秩序の擁護論、そして知識論の要であり続けたのである。

36 『意味』の内容については、拙稿「マイケル・ポランニーにおける知識論と社会論——『意味』を中心として」『同志社商学』（第六九巻・第六号、二〇一八年）を参照。そこでは「統合」の哲学という観点から自由社会論、知識論、芸術論、宗教論を統一的に解釈している。

37 Burke, E., *Reflections on the Revolution in France*, edited by J. G. A. Pocock, Hackett, 1987, p.162. [中野好之訳『フランス革命についての省察』下巻、岩波文庫、二〇〇〇年、九四頁]